JMSCA 登山月報 第610号 令和２年１月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）

登山月報

チョモ・ユモ（6,829 m）

コンバインド予選大会（フランス・トゥールーズ）報告 …… 2
アジア選手権ボゴール大会報告…… 3
第９回日本山岳グランプリ…… 5
第134回 Mountain World …… 6
新連載『日山協と私』 …… 7
夏山リーダー講習を受講して…… 9
令和元年度自然保護委員総会（第43回山岳自然の集い）宮城県大会報告… 11
JMSCA、寄贈図書、表紙のことば、編集後記 …… 12

No.610

コンバインド予選大会（フランス・トゥールーズ）報告

会場：フランス共和国トゥールーズ・トゥルヌフィユ
日程：2019年11月28日（金）～12月1日（日）

オリンピック選考大会の一つであるコンバインド予選大会がフランス共和国トゥールーズ・トゥルヌフィユで行われた。出場選手数は当初、今シーズンのコンバインドワールドカップランキングの上位選手から各国男女各国上限２名で男女各20名の予定だったが、ＩＦＳＣが大会直前に各国の出場上限枠を設けないことを発表したことにより、最終的には上位から合計22名ずつが招待され、東京2020大会への出場権（男女６名ずつ）をかけて戦った。日本からは男子４名（楢﨑明智、藤井快、杉本怜、土肥圭太）と女子２名（森秋彩、伊藤ふたば）が参戦した。

大会は男子予選、女子予選、男子決勝、女子決勝がそれぞれ１日ずつ、４日間にわたって行われた。

１日目の男子予選では、まずスピードで自己ベストに0.001秒差の6.463秒を出した土肥が４位でスタートした。スピードスペシャリスト対決では、Alfan Muhammad（ＩＮＡ）を抑えBassa Mawem（ＦＲＡ）が１位となった。ボルダリング では上位10名が３完４ゾーンのアテンプト勝負となった。楢﨑が誰も登れなかった４課題目を登り３位、集中した登りをみせたがわずかなアテンプト差で藤井が４位となった。タレントが揃った男子選手の中でリードの高度が確定するたびに、決勝進出ラインを争った総合結果がダイナミックに一進一退する中、藤井が６位、楢﨑が８位で決勝へ進出することができた。

リード予選では４番目出場の選手が登攀中に力をかけたハリボテが落下し、間一髪で大惨事には至らなかったものの、選手、ビレーヤー、ジャッジ、観客にとって危険な一場面があった。大会運営に関しては起こりうる全てのリスクを予測し、一人一人が細心の注意を払って取り組んでいかなければならないことを改めて

大会会場

感じさせられた一件だった。

２日目の女子予選は、Aries Susanti Rahayu（ＩＮＡ），YiLing Song（ＣＨＮ），Anouck Jaubert（ＦＲＡ）を含むスピードスペシャリスト５人のうち、22人目で追加になったJuliia Kaplina（ＲＵＳ）がスピードで１位となり優位に立った。一方、スピードでは22位となった森秋彩だったが、ボルダリング４完４ゾーンで２位、リードで唯一完登して１位となり、予選を１位で突破した。伊藤ふたばは予選スピードで９.003秒をだし７位スタートした。その後ボルダリング で３完４ゾーンの７位、リード８位につけ、予選を５位で無事通過した。

３日目の男子決勝へは藤井快、楢﨑明智が進出した。スピード決勝トーナメント１回戦でミスをしなかったPan（ＣＨＮ）に負けた藤井だったが、その後のトーナメントを全て勝ち抜き５位、楢﨑は１回戦を勝ち上がったが４位でのスタートとなった。ボルダリング では共に２完３ゾーンの楢﨑が１位、藤井が２位となり、楢﨑が複合レース１桁（乗積ポイント４）で有利な状況で決勝に臨んだが、予期せずリードが７位に終わり、複合成績３位となった。Adam（ＣＺＥ）に一手届かなかったが藤井が渾身の登りで２位を獲得し、奇遇にもこの

女子表彰台

男子表彰台

日誕生日を迎えた藤井が複合種目を優勝した。

４日目の女子決勝は、伊藤ふたばがスピードで決勝トーナメント１回戦を勝ち抜き４位、ボルダリングは３完３ゾーンで１位を獲得し、複合レース１桁（乗積ポイント４）の圧倒的有利にたって最終のリードに臨んだところ、リードでは７位で複合種目優勝となった。

森秋彩はスピード８位に続き、ボルダリングでは１アテンプト差で２位となった。リードは同高度４人で核心の一手を止めることができず４位となり、総合結果は５位となった。ただ、リード同高度で５位となったLaura Rogora（ＩＴＡ）とはクライミングタイムが１秒差であり、もし１秒以上遅かったら決勝結果上位６名には入っていなかったことを考えると、複合種目の選手の組み合わせや種目結果等様々な要因が最後の結果まで影響する難しさと観客にとっての結果の分かり難さを感じた。

本大会中に特に印象に残ったのが複合出場各国選手のスピード競技力が上がっていることであった。決勝に進出した男子選手のうち、自国選手とスピード専門選手を除いてスピード種目で自己ベストを出してきた。これからもスピードタイムはまだ上がってくることが予想される。予選で安定してベストタイムを出せると同時に、決勝での対人トーナメント方式でも勝てるような練習機会を増やしていくことが重要と感じた。

ボルダリング壁

また、スピード選手の中でもボルダリング、リードに大きな改善が見られる選手も見受けられた。フランスのBassaの他、世界選手権で出場を決めた本来スピード選手であるが他２種目もポテンシャルの高いカザフスタンのRishat Khaibullinがチェコに拠点を移してトレーニングを開始したり、海外の選手が日本でトレーニングをしたりと、強みをさらに伸ばした上で環境を変え短期間で弱点を克服してくる選手が今後もあとを絶たなそうだ。

（文責：星多賀子）

アジア選手権ボゴール大会報告

１．大会の様子

【大会名】ＩＦＳＣ−ＡＣＣ Asian Championships 2019

【開催地】インドネシア共和国西ジャワ州ボゴール市

【開催期間】2019年11月６日〜10日

当初は、昨年アジア競技大会が行われたパレンバン市で予定されていたが、３ヵ月前に会場が変更となりボゴール市が開催地となった。赤道が近く日中は35℃を超える高温でありながら、クライミングウォールも太陽の日を浴びる状態で選手達にとっては非常に厳しいコンディションでの競技を強いられた。またホテルから大会会場へのシャトルバスの運行やメディカルドクターなどの遅延、スコールによる競技時間も何度も変更になるなど大会運営がスムーズに行われないことから選手達にとってはタフな大会となった。しかし、そのような条件の中でも日本選手達は大活躍してくれた。

大会前にはＩＦＳＣルールとは異なる参加資格（ＡＣＣルール）が発表され、それにより世界ユースやアジアユースからも多くの日本選手を派遣することができることとなり男子９名、女子４名が参加した。

２．大会成績と日本選手の活躍

①ボルダリング男子

予選では出場した９名全員が通過し、決勝には、準決勝１位通過だった緒方良行、川又、小西、藤井の日本勢４人が進出した。

決勝は、第１課題を一撃した緒方と小西がアテンプト差での首位に立つ。しかし第２課題でゾーンを獲得した小西が単独首位に立つと、第３課題は完登で１位となる。

最終の第４課題では、藤井がゾーン獲得のみに終わり、完登すれば優勝のチャンスがめぐってきた小西が、見事に一撃し優勝した。

②ボルダリング女子

ボルダリング女子では、決勝に倉と高田の２名が進出。第１課題はソ・チェヒョン（韓国）と倉のみが完登すると、第２課題はともに一撃。挽回したい倉だったが、第３、第４課題は完登できず、２位となった。

③リード男子

ボルダリングに続き、出場した日本人男子全員が準決勝に進出。リード種目で大会２連覇中の藤井のパフォーマンスは最後まで会場を沸かせた。

藤井は予選の２ルート、準決勝といずれも単独首位の成績で決勝に進出した。決勝では田中が藤井の前に完登し、優勝には絶対に完登が必要条件となった中でも、そのプレッシャーをはねのけて見事に完登し、カウントバックで藤井の３連覇となった。２位に田中、３位に本間となり、前日のボルダリングに続き日本男子が表彰台独占した。

④リード女子

予選はワールドカップ年間ランキング１位のソ・チェヒョン（韓国）でさえも中間部までしか登れない程に厳しい内容であった。その中、倉、栗田、高田の日本勢３名が決勝に進出した。

決勝は、倉が高度38の好成績で準決勝６位から２位へと大幅にステップアップし、準決勝２位だった栗田は５位、同５位だった高田は７位に順位を落とした。優勝は唯一完登したソ選手であった。予選から全ラウンド１位での圧勝だった。

⑤スピード男女

チャイナオープンで女子ジュニア日本記録を更新したばかりの倉がこの大会でもさらに記録を塗り替える9.278秒を予選でマーク。決勝トーナメントの初戦も勝利し、最終的に６位入賞となった。日本男子最高は19位の緒方良行だった。

大会会場

そして、この種目では予想通りインドネシア勢の大活躍となり、男子のレオナルド・ベドリックがビッグファイナルで５.406秒を計測し、非公認ながら新たな世界記録も生まれた。女子でもイコマ・ヌロが制し、男女表彰台６名中、５名が地元・インドネシア勢となった。

⑥コンバインド

日本選手では、男子が藤井、緒方良行、今泉結太、天笠颯太の４名、女子は倉が進出した。

男子決勝は、スピード種目で日本勢に明暗が分かれた。１回戦の制したのは藤井のみで、そのほかの３名は敗退し５位以下に沈んでしまう。

スピード４位の藤井は、ボルダリング種目で難関の第

男子コンバインド表彰式

集合写真

２．成績一覧

種目	コンバインド	リード	ボルダリング	スピード
男子	１位　藤井　快	１位　藤井　快	１位　小西　桂	１位　Leonardo Veddriq（ＩＮＡ）5.406秒
	２位　緒方　良行	２位　田中　修太	２位　藤井　快	２位　Kiromal Katibin（ＩＮＡ）
	３位　今泉　結太	３位　本間　大晴	３位　川又　玲瑛	３位　Adi Mulyono Rahmad（ＩＮＡ）
	６位　天笠　颯太	４位　緒方　良行	４位　緒方　良行	
	９位　石松　大晟	７位　今泉　結太	９位　天笠　颯太	
		９位　百合草碧皇	10位　今泉　結太	
		10位　西田　秀聖		
女子	１位　Nurul Iqamah（ＩＮＡ）	１位　Seo Chaehyun（ＫＯＲ）	１位　Seo Chaehyun（ＫＯＲ）	１位　Nurul Iqamah（ＩＮＡ）7.700秒
	２位　倉　菜々子	２位　倉　菜々子	２位　倉　菜々子	２位　TIAN PeiYang（ＣＨＮ）
	３位　Lee Hung Ying（ＴＰＥ）	３位　Kharisma Ragil Rakasiwi（ＩＮＡ）	３位　Lee Hung Ying（ＴＰＥ）	３位　Sallsabillah Rajiah（ＩＮＡ）
	９位　高田こころ	５位　栗田　湖有	５位　高田こころ	
	10位　栗田　湖有	７位　高田こころ		

※３位以上の全選手と10位以上の日本人選手

１課題を見事完登し、第３課題は一撃して唯一の２完登。総合成績でも４ポイントとなりロジ（インドネシア）と並び首位タイとなる。最後に一撃した緒方、今泉もこの種目２、３位につけ、望みをつなぐ展開になった。

優勝争いは藤井とロジの一騎打ち、最終のリード種目で決着をつけることになる。ロジの高度は25＋で終了、しかしここでスコールが降り始め最終選手の藤井は雨の中登り始める。ホールドは濡れておりコンディションは最悪の状況ではあったが、ロジを超える同33まで登り見事タフな試合を制して優勝した。

総合２位にはリード２位に入った緒方が、同３位にはリードで唯一の完登者となった今泉がスピード最下位からの逆転で入り、ボルダリング、リードに続く今大会３度目の日本男子表彰台独占となった。

女子決勝では、スピード種目で２日前に自己ベストを更新した倉が初戦を制し３位で次のボルダリング種目へ。続くボルダリングでは第１課題はゾーン獲得のみと出遅れたが、第２、第３課題を連続で一撃。アテンプト差でこの種目１位となった。

合計成績ではイコマ（インドネシア）と３ポイントで１位タイとなった倉は、最後のリード種目で、イコマの高度15＋に対し14＋でフォール。わずかの差で敗れてしまったが、ボルダリング、リードに続き、この大会３つ目の銀メダルを獲得した。

３．総評

本大会では日本が他国を大きく引き離す12個のメダルを獲得し存在感を示してくれた。そして、特別ルールによりユース日本代表も出場でき、トップチームでもユース選手が戦えることを示してくれ日本チームの層の厚さを示せたことも大きな収穫であった。今後の日本代表選手の選考はより一層厳しくなることを感じる大会で会った。また本大会は決して容易に勝てる大会ではなかった。特に地元インドネシアのロジ選手（男子）、イコマ選手（女子）の両名は３種目すべてのパフォーマンスが高く私たち日本チームの脅威になった。このように世界大会には参加していないがポテンシャルの高い選手達がまだまだアジアや世界中にいるかと思うとパリ2024オリンピック大会へ向けた選手強化はより一層厳しいものになると確信した。

（文責：日本代表ヘッドコーチ 安井博志）

第９回日本山岳グランプリ

第９回日本山岳グランプリは、永年、山岳雑誌『岩と雪』の編集長を務められた池田常道氏に決定した。池田氏は、1944年12月、埼玉県浦和に生まれ。高校時代から街の山岳会で東京近郊の山歩きを始める。早稲田大学時代にハイキングクラブに入会し、顧問の川崎隆章氏の薫陶を受け、上越国境・南会津の山々を彷徨する。

1969年に㈱山と渓谷社に入社。1972年から『岩と雪』の編集に携わり、77年から95年の休刊まで編集長を務める。編集長時代は、巻末の英文サマリーを充実させ、海外登山界との交流を促進。世界の登山誌を結ぶ国際ネットワークを構築し、定期的な情報交換を果たす。

JAMSCA

第9回日本山岳グランプリ
グランプリ

池田常道 殿

あなたは 永年に亙り『岩と雪』の編集長として世界中の登山記録を収集・編纂して登山者に情報を提供されてきました 世界に張り巡らされたそのアンテナにより 登山界の潮流を逸早くキャッチされ 日本のアルピニズムの発展に影響を与えてこられました 以前ネパールでは「E.ホーリー・ファイル」に記載されたのが真のヒマラヤ登山記録と云われましたが まさしく日本では「池田ファイル」に記載されたものが真の登山記録である と言っても過言ではなく記録に関しては 徹底的に調査・分析されてきました
これら永年に亙る多大な功績にたいし ここにグランプリを贈ります

令和2年1月11日
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
会 長 八木原 圭明

雑誌編集の傍ら、『高所登山研究』『ヒマラヤ研究』『ビッグ・ウォール・クライミング』などの山岳書を企画・編集。共訳書に『ヒマラヤン・クライマー』『ヒマラヤ・アルパインスタイル』などがある。退職後フリーとなり、2013年には『世界の山岳大百科』の日本語訳を監修。2015年には『現代ヒマラヤ登攀史』を上梓されるなど、長年に亘って登山界に尽力された多大な功績に対してグランプリが贈られた。

ヨルダン・トレイルを2泊3日で歩き、最高峰に登る山旅
ヨルダン・トレイル・トレッキングと
最高峰ウンム・アッダーミ登頂 10日間
発着地 東京 | 出発日 4/14(火)・5/17(日) | 旅行代金 648,000円
※燃油サーチャージ（2019年12月20日現在：目安約0円～19,000円）が別途必要です。
旅行企画・実施 観光庁長官登録旅行業第490号／日本旅行業協会正会員／ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社
山旅専用フリーコール ☎0120-938-290
e-mail:info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

第134回 Mountain World

この冬のＫ２挑戦はどうなる?

池田常道

冬季未踏の8000ｍ峰としてただひとつ残されているＫ２（8611ｍ）は、今冬果たして登られるのか。

1988年のシーズンに故アンジェイ・ザヴァダ隊長率いるポーランド隊が南東稜から試みて7530ｍに達して以来、繰り返された挑戦はすべて失敗に終わっていた。2003年にポーランド＝カザフ隊（クシストフ・ヴィエリツキ隊長）が北稜から7680ｍ、2012年にロシア隊（ヴィクトル・コズロフ隊長）が南南東リブから7200ｍに達し、2018年には再びヴィエリツキ隊長のポーランド隊が南東稜の7600ｍで敗退した。

カザフからロシアへ国籍を移していたデニス・ウルブコは、ポーランド国籍も取得してこの遠征に参加したが、ナンガ・パルバット（8126ｍ）で起きた遭難事件の救援に派遣されてＫ２に戻ってみると、あまりにも遅い進捗ぶりに業を煮やし、隊長の許可を得ずに単独攻撃を敢行して隊を離脱してしまった。

2013年と18年にいずれも冬季Ｋ２の最高到達点を記録しているウルブコ（45）は、Ｋ２の冬季初登頂を狙う第一人者と目される存在だが、今季はどうやらブロード・ピーク（8051ｍ）に行くことに決めたらしい。カナダのドン・ボーウィ、元ミス・フィンランドのロッタ・ヒンツァとの３人パーティ（写真）だという。今年の春にエヴェレスト登頂を目ざすヒンツァは昨年、ボーウィのガイドでガッシャブルムⅡ峰に登っている。

ウルブコは今回、Ｋ２の登山許可も手に入れているが、「ブロード・ピークをやってからＫ２に挑むのは荷が重い」と予防線を張っている。しかし、現代最強の高所クライマーと自他ともに認めるウルブコなら、条件が許せばＫ２の単独攻撃に踏み切るのではないかという期待も抱かせる。

彼によれば、「冬」とは２月を以て終わるもので、ポーランド隊の12年ブロード・ピークと13年ガッシャブルムⅠ峰は３月に入ってから登っているので、厳密にいえば冬季登頂とは認めがたいのだという。ヒマラヤ、カラコルムの高峰では当初「気象学上の冬」（12月１日～２月末日）の定義が採用されていたが、最近はアルプスの例にならって「カレンダー上の冬」（冬至～春分の前日）が重視される傾向がある。たしかに、彼の冬季初登頂は、06年のマカルーも11年のガッシャブルムⅡ峰も、２月中に登頂を果たしている。どちらも、シモーネ・モーロと組んで行なったものだった。

なお、ウルブコとボーウィは１月２日、ＢＣから４時間で5800ｍのＣ１地点に達し、「まずまずの出足」と報告している。

もうひとりＫ２に意欲を示しているのが、ネパールのミンマ・ギャルジェ・シェルパ（33）だ。過去２回、南東稜から頂上に立っている彼は無酸素で挑戦する意向を示していたが年末までに十分な資金が集まらず、７万5000ドル不足していた。彼は12月に、両足義足の中国人シャ・ボユを南米アコンカグアにガイドしたが、シャの不調で断念。その後パキスタンに飛んで、チームに合流した。メンバーはジョン・スノーリ・シグルジョンソン（アイスランド）、トマジ・ロタール（スロヴェニア）、ガオ・リ（中国）。シグルジョンソンは17年に、ロタールは18年にそれぞれＫ２に登っており、ガオ・リも昨年7800ｍまで達している。一行はこの４人に、パキスタンのシルバズ・ハーンと、ネパールから３人のシェルパ（タムティン、パサン・ナムギャル、キリ・ペンバ）を加えた８人編成にふくらみ、その分費用もかさむことになった。

ヒマラヤ冬季登山のもう一方の雄、マカルーなど４座の8000ｍ峰冬季初登頂記録を持つシモーネ・モーロ（イタリア）は、南チロル女性のタマラ・ルンガー（33）と組んでガッシャブルムⅠ峰（8080ｍ）とⅡ峰（8034ｍ）の継続を目ざし、ボルツァーノでの低圧訓練を消化してから、12月31日にＢＣ入りした。このペアはこれまでにマナスル（8163ｍ）の冬季登頂に挑んで敗退、16年のナンガ・パルバットではモーロが他のメンバーと頂上に立ったが、ルンガーは70ｍを残して涙を呑んだ。

デニス・ウルブコ（中央）はドン・ボーウィ（左）、ロッタ・ヒンツァ（右）とブロード・ピークを目ざす

新連載 ～創立60周年に向けて～ ⑳

『日山協と私』

兵庫県山岳連盟 技術・遭難対策委員会 指導委員会
顧問 **松本 憲親**

はじめに

私が冬山へ向かう決心で山岳会に入会してから50年近く日山協にお世話になっています。日山協の一登山者としての当初のメリットの第１は遭難救助保険で、第２に学ぶ場と知己を得たことでした。前者では自らの起こした事故及び仲間の事故に際して何度も経済的に助けられ、後者に関しては指導員資格取得の他、大いに勉学の場を与えられ、尊敬する多くの知己を得たことです。第３は海外遠征の推薦状を貰えたことで、２度の高峰遠征が出来ました。本稿執筆の機会を与えられ、恩義の認識を新たにし、また上記遭難では多くの友を死なせたことと共に、登山界にマイナスの影響を与えたことに責任を負う思いと、自らの山行や技術研究が慰霊と贖罪になればとの思いを日々新たにしています。尚、本稿では英外来語のカタカナ表記を米語の発音に似せた表記法としたのは、欧米クライマズとの意思疎通の助けとなるとの考えからです。

１．私の修行時代――強徒歩旅行から山へ

高３の夏休み、神戸から奥丹後半島の先端を越えて、袖志集落迄120余kmを歩き、高卒後も３回の日本海行をしました。私の徒歩行は全て野宿で、神戸―宮津100kmを２日で、神戸―福知山―久美浜150kmを３日で、神戸―宮津―間人200kmを４日でした。その間に職場の先輩から白山に誘われ、最初に山と聞いた時は断ろうと思いましたが、南限・北限植物に釣られた同行でした。頂上で赤から紫に変わる東方の山々を見て、山も良いものだと悟りました。当時はしごきが方々で有り、私は山岳会への入会を嫌い、同期入社のメンバで夏山を始めたが、当初ラク・クライミングは軽視していました。

私が夜学生の折に妻が妊った時、ラク・クライミングを含む登山に熟達することを思い付き、夏山の相棒と二人でクライミングの訓練を始め、同時に阿部和行氏の「岩登り技術」を精読しました。２年間の関西周辺でのクライミングの後、滝谷末端から屏風岩東壁の登攀に挑戦し、大スラブ・ルートを全ピチ、リードして屏風の頭で思ったことは、「こら冬壁遣らなあかん」でした。それ迄冬山行の考えも無かったし、後に行くこととなったヒマーラヤ、カラコーラムを、この頃は夢想だにしませんでした。

２．日山協との関わりはじめ ―― 紫岳会入会とＯＭ（大阪方式）

1970年秋になって「紫岳会」に入会したのが日山協との関りの始まりで、４冬目が剣岳西面行でした。その時、阿部氏が同行の会員に示したのは、堀江栄次氏の「同時登攀中の制動確保法」で、それを見た私は、自分の方法が優れていると確信しました。その技術のきっかけは、岩場で私がロウプを肩に掛けた「肩がらみ」の形での同時行動中にパートナが落ちるのを止めたことでした。

大阪岳連冬山講習会の私の担当班の諸氏にこの技術を初めて伝授し、その後この技術を大阪岳連の技術委員会で開発することとなり、スペア・ロウプの携行法、弱い制動の掛け方、岩のスラブでの限界他多くの知見を得て、同一斜面での歩行中の墜落、ビヤンドや稜線からの墜落、後続者の滑落他の種々のカンテイニュアス・クライミング時の墜落の確保に非常に有効なことが分かり、技術委員会では「大阪方式」と名付けました。

1975年５月末の文部省登山研修所「一般山岳団体指導者春山研修会」に実技講師として初めて参加した時の主任講師が日山協指導常任委員の増子春雄氏でした。氏は私の積極性と論理性を気に入って下さったのか、その後の文登研での講師・専門調査委員を永く続けるきっかけを作ってくださいました。文登研の講師・専門調査委員仲間に尾形好雄専務理事と小野寺斉常務理事がおられ、当時の研修会や委員会でのご活躍は際立っていましたし、現在のご活躍を有難く思っています。

1978年３月に八ヶ岳での日山協研修会で「大阪方式」を紹介しましたが、実技研修の前日午後、増子氏

にお会いしてパートナをお願いし、技術検証した結果、氏は私の技能を驚きをもって認めて下さり、翌日の実技研修の昼過ぎには、20人程の参加者の殆どが通常の斜面での「大阪方式」をミヤスタしていました。

その年に「岩と雪」に「大阪方式」を発表し、広く評価頂けたと思ったその後、「技術内容がある程度分かる名称にすべきだ」とのご批判を頂戴し、発案者の責任で、変な英語ながら、Over-Body Surface Friction Running BelayMethod略して「ＯＭ」と改名することを「岳人」に発表したが、定着したのでしょうか。

別の批判として、この方法を使っていて氷河で落ちて水死した例が有ると聞きました。

岩場での制動確保では、制動ロウプの繰り出し過ぎを戒め、必要最小限のスライディング・ロウプ・レングス（Wexler式中のＳ）が求められるが、オウヴァヒャングでの墜落では制動による衝撃吸収が必要な場合が多い。悪いトリヤヴァースの上部でセカンドを確保する時のアンカが不安であれば、リーダーはセカンドを制動確保すべき時点を判断せねばならない。この様にスポート・ルート以外では、不確かな支点なら制動確保が当たり前でしょ？だから、制動確保無用論者にはＯＭ（大阪方式）は理解できないかもしれない。

堅雪にクランポン装着で直立した確保者を60ｋｇｆで横に引いても倒れず、足を踏み出して腰で引けば120ｋｇｆに、腹ばいでアクスのピクとクランポンを利かせば200ｋｇｆに耐えるデイタが有る。確保体制が強ければ強い制動でロウプの繰り出しを少なくし得る。軽・中・強の制動の掛け方を変える技能練習にさほどの時間を要しない。しかし、あらゆる変化する地形・表面性状に合わせた、体勢と制動の掛け方を咄嗟に決定でき、警戒しながら素早く同時行動する技能の獲得には時間が掛かるものと考えねばなりません。

氷雪斜面を墜ちるクライマをＯＭ（大阪方式）で確保する時に、制動距離を大にする弱い制動が必要な場合と、反対に短いロウプの繰り出しで、確保者に大きな力が掛かる確保が必要な場合があります。

５月の剣岳の各所の雪庇状の地形での確保実験を何度も行ったが、ロウプで直接確保者が引かれ、制動確保できないタイト・ロウプ・ビレイでも止まる場所では、大阪方式（２人の間隔は約３ｍ＊）はロウプの繰り出しも少ない、余裕のある確保ができた。＊雪庇崩壊を考える時はＯＭ（大阪方式）でも二人の間隔を離さねばならない。

クレヴァスに落ちるパートナが空中を落ちれば、ロウプの伸び始めからロウプがクレヴァスの縁を切ることで墜落エナジを失い、必要なロウプの繰り出しが少なくて済むのは雪庇の場合に似ている。下に水が流れる状況ではクレヴァスの縁の温度はそれ程低くなかったと考えられ、制動ロウプが多く繰り出されたことは制動が弱すぎたからと考えるべきでしょう。

兵庫・大阪・京都の限られた人達が比良山の雪で毎年の様に「スティヤンディング・アクス・ビレイ」と「ＯＭ（大阪方式）」の訓練を行っているが、全国的にはどんな様子なのだろう。

数年前に剱岳前剱の軟雪壁で、ガイド付きの登山者が滑落してガイドが引き込まれた事故が有ったが、この場合はＯＭ（大阪方式）で確保できたのにと考えました。日山協ではどう考えるのだろう。

３．山岳レスキューのこと

私はマウントウニアリング、イクストウリームアルピニズム他の多数の登山書の精読に努め、それを私が主宰する「関西登山技術研究者の会（頭字語英名ＫＭＴＡケイムタ）で紹介しています。山岳遭難救助技術に関しては、セルフ－レスキュー、ＣＭＣ・ロウプ・レスキュー・マニュアルに次いで、セルフ－レスキュー第２版の中間あたりを翻訳中です。アンカに関しては私らの研究が数段先んじているが、救助技術に関しては米国が進んでおり、特に教えられたのはリダンダンスイ＝重複性の重視です。平たく言えば、あらゆる場合にバカプを確実にします。例えばクライミングで、確保者が確保ロウプから手を放して確保に失敗する場合が有るが、救助の場合は救助者が担当スイステムから手を離したら、要救助者等の移行が停止するだけで、彼等が墜落することはあり得ない。米国で広く実施されるウイスル・テストはこのことを確認する為の救助者の決まり事です。

この国の一指導者が「確保ロウプは死んでも離さない」と言うが、死者は何も握れない。文登研では、私の何回かの主任講師の際や「登山研修」で、バカプの重要性の啓蒙に努めたが、スインムプル、スピーディーを重視し、万一の備えにもなる確保の際のグリグリやプラスイク（プルージク）の使用に至っていない。

都岳連の講習会で固定用綱の先端に結んだフィギュア・エイト・オン・ア・バイトに掛けたユーティリティ・キャラビーナを別のスタフが誤ってアンカにクリプし、その固定綱で介助懸垂下降中の二人が、結びが解けて墜落・大けがする事故があった。裁判では、固定綱の先端結びを作り且つユーティリティ・キャラビーナをその結び目に掛けた、部門責任者一人の責任となった。当時の私らの常識では、別ロウプでの確保、それもこの場合に必要なインディペンデント・ビレイ（以下ＩＢ）の無視は、救助訓練に不可欠な知識の欠如だ。群馬県・黒岩の救助訓練事故も“ＩＢ”が必要だった。更に、“ＩＢ”には確保者が手を放しても大丈夫なスイステムの構築が必要なのです。一次的失策対処機構が“ＩＢ”であり、その機能を強化する機構を構築するのです。

４．新たな確保方法の事

東京オリムピック・クライミング選手の安全性の担保を私は危惧する。リード・クライムで選手が第２ラナを掛け損ねて落ちれば、一般的確保技術ではグラウンド・フォールを免れない。現状ではその対策として特別に厚いクラシュ・ピャド或いは訓練したスポタを用意するか、エドウイン・モウザズ確保はこの状況では効果薄なので、奈落を造り、確保者がそこへ飛び降りるかですね（それに似た確保は実際に行われる）。

墜落するクライマが１ｍ落ちるのに要する時間は0.45秒で、平均的な反応時間だから、その間に確保ロウプをテイクーインし、同時に後ろに倒れ込み、落ちたクライマを着地させない確保は随分前に実験済みだが（文登研にて）、最近新たな方法を考え、計算もした。その実験で、神戸登山研ピラミド・ウオール直下地面の立位確保者が後方７ｍ【長いことに意味がある】の地上にビレイ・アンカを設置し、ロウプを弛ませずに確保した。ついで、リーダーが第２ピンに手が届く位置から墜落したが着地せず、同様重量の確保者の足先は僅かに（目視で５㎝以内）地面を離れただけだった。このことから、確保者が軽くても吊り上がる距離を制限できることが分かり、上記と組合わすと、同様状況での「手繰り落ち」にも十分に対応できると予想しました。

５．日山協への期待

私が影響を受けた日山協八木原会長はじめ理事各位が、強い指導力でこの国の登山界を牽引して下さることを期待する一方、登山部の各委員会が力を結集して、技術レヴェルの躍進を図ると共に一般に普及させ、遭難事故の減少に寄与されることを期待する次第です。

夏山リーダー講習を受講して

茨城県　種田　理恵

１．友人らとともに登山を楽しんでいる私に、登山を楽しむために必要な知識を得ることを神奈川岳連の清水さんに勧められて申し込むことにしました。多分、私のような、山岳会に所属していない一般登山者が、安全に登山を楽しむために必要な事柄を学んでほしい、という趣旨の講習と思いますが、実際のところ、岳連の知り合いがいなければ、講習の存在そのものを知ることはなかったのでは、と思います。また、リーダー講習と言うだけあり、受講生も一般的な知識はすでに持ち合わせているような感じがしました。

講習会では、13人の受講生が３つの班に分かれたため、他班の受講生とは初日夜の懇親会で意見交換をしただけになりました。自分のことに精いっぱいで、受講生の名前と顔がうろ覚えです。どこかの山で或いは街で会っても分からないかも、ごめんなさい。

２、講習は、座学から始まりました。

実地前に基礎的な知識の確認。文化やリスクを認識したうえでの登山計画と実行の必要性を再認識しました。一緒に行動することになる班メンバーの登山経験や性格を知る機会でもありました。

その後、私にとっての最初の難関、実地の読図を行いました。比較的メジャーな登山道を歩くだけの私は、読図しながら歩くことはなく、苦労しました。大倉から大倉高原山の家までをほぼ往復。後半講習のテント泊を大倉高原山の家で行う予定だったそうですが、台風19号の影響で水が出なくなったということで、キャンプ場に変更になりました。現実の山行ではあるがままに、ですが、トイレが微妙だったので変更になってちょっとホッとしました。

同じ班の長谷川さんと水谷さんは、ナビゲーション検定ゴールド資格を有していて、読図完璧。諸岡さんと私がもたもたしているとさっと説明してくれて、分かったような気がしましたが、さて、すでに忘れたような気がします。山の仲間と共にこれから勉強していきます。

３．翌日（講習２日目）は、実際の山行です。林道で読図したあと、政次郎尾根から頭にでます。尾根を三ノ塔まで歩き、三ノ塔尾根から山岳スポーツセンターへ帰還。最初は読図しながらゆっくり林道を歩き、戸沢口からは登山道を通常ペースで歩きます。

同じ班の長谷川さんはトレランもするからでしょうか、体力があり余り、ペースが速いです。私はほとんど常に初心者役状態。後半の講習時に確認したら、講師の今枝さんも速いと思っていたようで、ホッとしました。

４．後半の講習は、登山計画書作成の宿題から始まりました。

伊藤さんによる設定（細かかった！）をもとに作成して持参したところ、班メンバー４人全員が行程の異なる山行計画を立ててきたのには驚きました。宿泊場所を間違えた人がいたのにはもっと驚きましたけど。

登山は計画８割とどこかで聞き覚えましたけど、設定では登山グループに新メンバーが加入したことになっていたので、各種確認事項を点検しました。テント泊装備は、共同装備の確認によって荷物を軽くすることが重要。私の普段の食事つき山小屋泊登山では、持ち物の分担はほとんどしないけど、共同装備を確認すると、もっと快適に登山ができるかもしれません。パッキングやテント泊装備を背負ってのコースタイムは、実際にやってみないとわからないですね。

５．装備を背負っての山行はなくなったので、テント泊は、設営して撤収して再設営になります。

吉川さんにテントを借りて、羽金さんと２人で初めてのテント設営です。最初の設営では少し設置場所や手順でさまよいましたが、２人でなら、テントってそんなに難しくないかも。撤収＆再設営はスムーズにできたつもりです。小雨の設営なので、濡れないようにする方法も考える必要があり、このテントでなら、山行できるかも（言い過ぎました）。雨で地面が柔らかいのでペグが打ちやすかったり、夜半はほとんど風も吹かなかったりで、幸運にも簡単な設営だったのだと思います

テント泊山行のうえでの私の最大の課題は、荷物が重くなることですね。荷物を軽くすることで行動範囲を広げているので、登山の楽しみかたが変わります。

６．テント泊をしたことがないので、当然テント泊の食事もやったことがありません。この講習で学べるかな、と思いましたが、今回は、オートキャンプに近いので、普通に食事作成。山ごはんを楽しむ日帰り低山ハイキングなら経験ありです！私たちは、夕食におでんとうどん、朝食はバゲットサンドイッチ。美味しさを重視しました。

他の受講生が何を食べていたか、殆んど覚えていません。瀬川さんがアルファ米利用のビーフシチューでしたっけ？講師陣は、ペミカンでしたので、テント泊な食事、って感じました。

テント泊とテント泊食事実体験は来年検定までの宿題とします。夏になったら簡単なテント泊登山を実行すべく、計画中！重くなりそうなので、あまり歩かない所にしたいです。お薦めはどこでしょう？

７．最後に、山岳スポーツセンターに戻って、セルフレスキューの講習です。９月に立山で講習を受けてきたばかりなので、まだ記憶に新しかったです。レスキューすることが生じないことが１番。安全第一で登山します。

８．安全登山の最大要因は天気、というわけで基本的な天気図の見方と観天望気も行いました。

前半２日目の登山前は雲一つない青空。秋の登山には最高ですが、講師的には残念だったでしょうか。尾根に出た昼頃には雲が湧いてきたので、観天望気で天気の予想も。後半の講習は打って変わっての曇天雨天予報。講習前日の天気予報からは、テント泊中止となりそうでしたが、登山ではないので普通に決行されました。

私の山仲間は普段から天気をものすごく気にし、ちょっとでも天気が悪い予報がでると、いかなーい、と言い出します。この天気なら行けるよ、と判断するのにも、天気の知識は重要ですね。

９．講習終了時に、誰か月報用の感想文を、と言う伊藤さんの目力に押されて、まとまりのない文章を書いてしまいましたが、結局のところ、普段の山行から勉強していくのみ、でしょうか。夏山リーダーを目指し、冬は、読図するのによい低山に行こうと思います。なお、受講生全員が、来年の検定がどのようになるかを気にしていると思いますので、早めの案内をお願いします。

令和元年度自然保護委員総会（第43回山岳自然の集い）
宮城県大会報告

自然保護委員会

自然保護委員総会（第43回山岳自然保護の集い宮城県石巻大会）を、11月９日（土）～10日（日）、宮城県石巻市鮎川町の牡鹿保健福祉センターを会場に、宮城県山岳連盟の主管のもと、22都道県から96名の参集を得て開催した。

第１日目には「東日本大震災からのグリーン復興―次代につなげる山岳自然環境」を大会テーマに、未だ大津波の爪痕が残る鮎川浜港を望む高台に建つ会場にて、委員長会議、開会式、基調講演、総会議事を、夕刻には会場を「ホテル・ニューさか井」に移し懇親会を、翌第２日目に鮎川浜港の沖合に浮かぶ「金華山」に渡り島内巡検を行った。連日の好天に恵まれて、盛り沢山の大会プログラムの２日間を順調に消化した。

（第１日目）

総会の開始に先立って参加都道県の自然保護委員長を集めた委員長会議が行われ、松隈自然保護委員長から進行と議事内容についての説明のあと、出席者の自己紹介を行い、総会開会式へとつなげた。

山田貞道宮城岳連副会長の司会で始まった開会式では、青柳武三宮城岳連顧問の開会宣言、吉田弘司会長の主管挨拶、ＪＭＳＣＡ安藤武典理事と松隈豊自然保護委員長の主催挨拶、開催地からの来賓として、鮎川まちづくり協会代表理事齋藤富嗣氏の地元歓迎挨拶と、石巻市牡鹿総合支所の大窪茂久氏から石巻市からのメッセージが代読され、大会のプログラムが進行した。

村上美智子宮城岳連副会長から、金華山の自然の精通者として、基調講演の講師の中靜（なかしずか）透総合地球環境岳研究所プログラムディレクターが紹介され、「金華山の森との会話」を演題に１時間の講演が行われた。概要は次の通り。

（基調講演概要）

金華山は山頂部がブナ、中腹がシデ、急斜面の尾根にモミと分布しているが、それらの稚樹が失われ、森林の後継樹が育たず、植生が草原化へと遷移するなど、森林環境が衰えている。この原因の一つにはシカの採食に依る稚樹の損失と考えられ、その証として、シカが食べない棘や有毒の草本が占めている。戦後の旧米軍が行った鹿猟や冬季の異常寒冷などの影響から、一時的に生息数に減少の兆候があったが、金華山ではシカを「神鹿」と扱う古来の信仰から特別に保護されて来て、捕獲などによる頭数管理が難しい状況にある。一方、樹木に対する病害虫の影響も顕著で、海岸林では枯損被害が目立つ。

総じて、島内の森林は傷つき、自然環境が衰退を辿っている。

シカには良いところもあるが、生態体系全体で見れば問題が多い。シカが神事とも関係しており、黄金神社の境内でも身近に接することができ、人との関係を見るには格好の場所とも言える。

「明日の巡検ではこの講演を参考にし、金華山の自然回復への思いを感じて頂きたい。」と結んだ。

第１日目の午後のセッションの冒頭、地元ＮＰＯ法人 FIRST ASCENT JAPAN 白井リカ副理事から大会テーマの説明が行われた。金華山は、歴史価値、自然環境、シカの食害、災害復興等々と課題が山積するとし、「≪グリーンの復興≫をキーワードに環境問題を考えよう。」とした。

引き続き行われた総会議事では、事業報告、委員会の体制、自然保護指導員の登録状況のそれぞれについてＪＭＳＣＡ自然保護常任委員から説明、次いで、参加団体毎に年間活動状況の発表が行われ、質疑が交わされた。

夕食を兼ねて行われた懇親会では、青沼武三宮城岳連顧問が開宴の発声と、ＪＭＳＣＡから坂口三郎顧問・田中文男顧問・中畠正喜監事、宮城岳連から吉田弘司会長・青沼武三顧問による鏡割りで宴が始まった。歓談が進む中、参加団体の順番のスピーチで盛り上がった。

（第２日目）

明けて10日、鮎川港から金華山へ渡船し、宮城岳連スタッフのリードで10時前後から４時間ほど島内を巡検し、島の自然を体感した。

金華山港帰着したあと、その場で閉会式を行い解散し、渡船に分乗して鮎川港に戻り各自の帰路に就いた。

（文責　松隈　豊）

総会議事後の集合写真

JMSCA

令和元年度
第8回理事会報告

日　時：令和元年12月12日㈭
14：15～17：10
場　所　Japan Sport Olympic Square
３階10号会議室
出席者　八木原会長、亀山、平山、丸各副会長、尾形専務理事、小野寺、水島、合田各常務理事、相良、蛭田、町田、村岡、村上、水村、山口、前田、六角、唐木、安藤、古賀、山本、古林各理事、中畠、古屋各監事
欠席者　小日向理事（ＩＦＳＣ会議出席）

１．開　会
会長挨拶の後、会議成立状況が報告され、理事23名中22名出席、監事２名同席で会議成立（定款第33条、定足数12名）。続いて議長を選出し、議事録署名人を指名して議事に入った。

２．議　題
議案第１号　議事録の承認について
第７回（12月）理事会議事録の承認が諮られ、異議なく承認された。
議案第２号　財政再建諮問委員会の設置について
亀山副会長より常務理事会で修正された設置規程と構成メンバーが諮られ、異議なく承認された。
議案第３号 理事の大会等謝金について
ＪＳＣの指導のもと、理事が大会スタッフ等で参加した場合に謝金を受け取れる事の機関決定について諮られ、異議なく承認された。
議案第４号 全国理事長会議議題について
全国理事長会議の議題が諮られ、異議なく承認された。
議案第５号 理事会「議事録」の在り方について
議事録の内容及び公開について協議されたが、次回理事会まで継続審議となった。
尚、議事録のWeb公開については、賛成９、反対11であった。
議案第６号　第15回ＢＪＣ、第３回ＳＪＣ 開催要項について
資料に基づいてＢＪＣ，ＳＪＣの開催要項が諮られ、承認された。
議案第７号 ＪＭＳＣＡ大会申請様式について
2021年度から公募するＪＭＳＣＡ大会の申請様式が諮られ、承認された。
議案第８号 環境省自然公園指導員の推薦について
自然公園指導員候補者として継続23名、新規11名の推薦が諮られ、提案通り承認された。
議案第９号 指導員の認定について
以下の認定承認が諮られ、異議なく承認された。
①スポーツクライミングコーチ１
小宮山弘子、橋本今史、川嶋一暢、橋詰正興、渡邉英人、神保敦子（以上、長野６名）、松本雄太郎、松木康祐、世俵眞、秋山真一、小宮麻湖、吉川とし子、上中惠子、浅井政臣、山本剛司、米山佳織、中村拓哉（以上、兵庫11名）

３．報　告
報告第１号　11月度月次会計報告について
資料に基づいて報告があった。
報告第２号　世界選手権検証経過報告について（議案２号と関連）
検証委員間には報告を上げたが、さらに精査して、次回理事会で報告することになった。
報告第３号　ＣＡＳ仲裁提訴の経緯・現状について
合田常務理事から口頭で報告があった。
報告第４号　国体スポーツクライミング競技規定の一部改定について
リード競技施設の規定改定が常務理事会で承認されたことが報告された。
報告第５号　アスリートパスウェイについて
年度途中でＪＳＣから承認された新規事業について具体的な報告があった。
報告第６号　ジャパンツアー2020について
来年度の公募基準について報告があった。
報告第７号　内閣府立ち入り検査報告について
11月28日に行われた内閣府実地検査の報告がなされた。
報告第８号　新春懇談会表彰者について
①岳連（協会）から推薦の功労表彰者
髙橋時夫（岩手）、工藤洋司（岩手）、上杉純夫（栃木）、女屋等志（群馬）、秋山教之（山梨）、伊藤克己（滋賀）、加茂隆弘（大阪）
②スポーツクライミング部推薦の優秀選手表彰
楢﨑智亜（TEAM au）、野口啓代（TEAM au）天笠颯太（日本大学）、関口準太（真岡市立真岡中学校）、平野夏海（国士舘高等学校）
尚、指導委員会推薦の３名については、後日メールにて回議することになった。
報告第９号　第９回日本山岳グランプリ贈賞者について
グランプリは、国際委員会から推薦された池田常道氏に決定。
報告第10号　創立60周年記念誌（案）について
創立60周年記念誌編纂（案）とスケジュールについて説明があった。
報告第11号　登山月報の発送について
『登山月報』１月号からヤマトメール便で発送し、経費削減を図ることが報告された。
報告第12号　メントール賞、女性スポーツ賞について
候補者推薦が、未だないとのこと。

４．専門委員会報告（抄録）
４－１．ＳＣ部　委員長・副委員長会議
ＪＳＯＳ３Ｆ　11月14日㈭18：00～
ア）ＳＣ指導委員会の業務内容→組織運営管理規定の改訂へ
イ）ＳＣ全体スケジュール
強化委員会作成：Time Treeを活用。各委員長・副委員長で入力→事務局員がチェック
ウ）ＨＰの整理12月の理事会でリニューアルを提案
エ）スピードジャパンカップ（ＪＴスピード戦の追加実施含む）
追加で実施せずにただ窓口を広げるのは、既にＪＴスピードに出場した選手への配慮も含め誠意がないのでは？
オ）義務研修の有料化→ガバナンス委員会で協議
カ）2020年度の競技スケジュール
ＣＪＣは岩手県盛岡市で実施の方向
キ）資格審査会（ジャッジ・セッター）
→合田氏から恒石氏に変更
ク）テストイベントの出場選手について
・来年ユースＢ世代が対象（男女各10名）
・各ＮＯＣにオブザーバー招待あり
ケ）三重国体
・４ルート設置は不可（自治体の判断）
・１人２ルート登れるように競技スケジュールを検討（種別を限定）

４－２．山岳スキー委員会
11月５日㈫　Skype会議　出席６名
ア）第14回日本選手権準備状況についての報告
ａ．レースコース設計では、スタートとトランジション、ゴール場所設定に問題があるので、再度検討する。
ｂ．レースポイント制については、今シーズンの導入はしないことで合意。
ｃ．日本選手権を2021年世界選手権代表選手選考大会とする事を確認。
イ）ユース選手強化について
喫緊の課題であるが、支援のための予算が問題。
ウ）ＩＳＭＦ選手登録について
山岳スキーのＡ登録についてＪＭＳＣＡと協議。

４－３．指導委員会－１
11月11日　出席９、委任３
ア）登攀技術研修会（大阪）の報告
10月26、27日　神戸セミナーハウス・百丈クライミングゲレンデ
①山岳コーチ２受講者　以下５名が合格。
渡邊智義（東京）、小暮洋一（東京）、出江俊夫（東京）、鈴木真琴（東京）、原田繁記（広島）
②Ｂ級主任検定員受講者
以下３名が合格。
水谷嘉宏（岐阜）、中村まさ子（石川）、明上邦彦（香川）
③Ａ級主任検定員受講者
以下３名が合格。
亀田行宣（石川）、金川信二（神奈川）、村上隆志（大阪）
イ）スポーツクライミング主任検定員養成講習会
①近畿地区　11/９　神戸登山研修所
以下、３名が合格。
佐藤建（更新/広島）、廣瀬政廣（更新/福岡）、奥井健吾（新規/京都）
②東京地区　12/14　昭島市スポーツセンター（講師：藤江、篠崎）
ウ）夏山リーダー講師養成講習会
①石川県（台風のため12月７日に延期）
講師：蛭田
②夏山リーダー講師養成講習会
11/17　神戸登山研修所
③夏山リーダー講師養成講習会
３/14～15　神奈川県立山岳スポーツセンター

４－４　ＳＣ医科学委員会

11月22日㈮　Web会議　出席７名

ア）今後の競技会医務担当割り当て
（ＪＭＳＣＡ主催大会医務予定）

◆2019年
・ジャパンツアーボルダリング第５戦
・ジャパンツアーボルダリング第６戦
・ジャパンツアーボルダリング第７戦
・全国高校選抜クライミング

◆2020年
・ボルダリングジャパンカップ

イ）各業務担当委員報告
①救護担当（代行、六角委員）
・ＪＴ、ワールドカップ印西　報告
②学術担当（代、六角委員）
・日本臨床スポーツ医学会報告
③強化連携担当（六角委員）
・ＢＭＩ問題の経過報告

ウ）オリンピック関係進捗
・ＩＦの医務担当として六角委員を選出。

エ）その他
①令和２年度予算案作成について
②１月開催医科学講習会について
③来年度委員改選について
④その他
今後基本的にWEB会議開催を原則とする。

４－５．遭難対策委員会

11月27日㈬　出席６名、ｽｶｲﾌﾟ参加８名

ア）理事会報告
①来年度予算について

イ）遭難対策委員会研修について
12/21㈯～22㈰　長野県山岳総合センター。研修内容の調整及び確認。

ウ）ＡＶＳＡＲ報告
①ＡＶＳＡＲ研修会について
２月上級講習会に向け、昨年度の反省と講習内容の確認を行う。（12/14）
②上級講習会
２/14㈮～16㈰　土合山の家
※基礎の講習会は、各山岳団体で実施。ＡＶＳＡＲの講習会は上級講習会のみとなる。
③『山と渓谷』2019年12月号掲載記事について
各都道府県山岳連盟（協会）への注意喚起。

エ）山岳レスキュー講習会（積雪期）開催記事掲載について
『山と渓谷』2020年１月号に掲載予定。

オ）ディスプレー広告による減遭難の全国啓蒙について
登山部会では減遭難の啓蒙活動として、ディスプレー広告を検討している。

カ）夏山リーダー講習会報告
①夏山リーダー講習会（神奈川岳連主管）
11/９㈯～10㈰　山岳スポーツセンター及び周辺の山
11/23㈯～24㈰　滝沢園（キャンプ場）及び山岳スポーツセンター
参加者：男性10名・女性３名
＜2020年度計画＞
夏山リーダー講習会：2020年10/24、25と11/７、８に開催予定。
「夏山リーダー検定会」：2020年11/28、29に開催を予定。
②夏山リーダー講師養成講習会・西日本地区（兵庫県神戸市）
11/17㈰、京都府山岳連盟主管
西日本地区（中国、四国、沖縄を含む）対象で開催。参加者43名
＜来年度計画＞
近畿地区で夏山リーダー講習会の開催を提案。

キ）ＵＩＡＡテキスト日本語版の進捗状況
翻訳が終了し、2020年３月までに上梓予定。

ケ）2020年全国遭難対策委員長会議について
東京オリンピック開催により、来年は大阪で開催。（６/27～28）

コ）減遭難活動について

４－６．指導委員会－２

12月２日㈪　出席11名、委任２名

ア）指導者認定申請
①長野県山岳協会　スポーツクライミングコーチ１、以下６名が承認。
小宮山弘子、橋本今史、川嶋一暢、橋詰正興、渡邉英人、神保敦子

イ）登攀研修会（大阪）（10月26、27日）が終了
①山岳コーチ２受講者　以下５名が合格
②Ｂ級主任検定員受講者　以下３名が合格
③Ａ級主任検定員受講者　以下３名が合格

ウ）スポーツクライミング主任検定員養成講習会
①近畿地区　11/９　神戸登山研修所。
②東京地区　12/14　昭島市スポーツセンター

エ）夏山リーダー講師養成講習会
①石川県 講師：蛭田
②近畿地区 夏山リーダー講師養成講習会
11/17　43名の受講者で盛況であった。
③夏山リーダー講師養成講習会を実施
（11/27遭難対策委員会報告参照）
④夏山リーダー資格認定ピンバッジ及びワッペンについて

オ）指導委員会のＡＣとＳＣ分離について
①指導委員長会議はどうするか
６/６㈯　ＡＣとＳＣに分かれて会議を行い、都道府県の委員長だけではなく、ＳＣ関係者も加え、ＳＣ主任検定更新も兼ねる会議にしてはどうか？　６/７㈰は、委員長会議とする。
②ＳＣ担当理事は六角理事
③月１回の指導委員会は、どのように開催するか
④ＪＳＰＯの窓口はＡＣ、ＳＣ分ける事ができないので、窓口は蛭田委員長
⑤義務研修は今後の課題
⑥その他
・委員もＡＣ、ＳＣと分ける必要がある

５．会務・役員派遣等

（11月14日～12月15日）

⑴海外登山懇談会　11月14日㈭
於：国立オリンピック記念青少年総合センター　八木原会長、岩崎委員長

⑵夏山リーダー講師養成講習会
11月17日㈰　於：神戸登山研修
蛭田、古賀理事

⑶加須市長表敬　11月25日㈪
於：加須市役所　八木原会長、尾形専務理事、村岡・前田理事

⑷（一社）全国山の日協議会理事会　11月26日㈫　於：弘済会館　尾形専務理事

⑸ＪＯＣ加盟団体会長会議　11月26日㈫
於：ＪＳＯＳビル　八木原会長

⑹ＪＯＣ／ＮＦマーケティングフォーラム
11月27日㈬　於：ＪＳＯＳ14Ｆ
尾形専務理事

⑺内閣府立ち入り検査
11月28日㈭　於：事務局内　尾形専務理事、小野寺常務理事、中畠・古屋監事

⑻ＪＯＣ総務本部第２回本部会

寄贈図書

寄贈本	講談社	「わたしのビーナス」樫埼 茜
	（公社）日本山岳会山梨支部	「甲斐百山」
	（株）山と渓谷社	「山と渓谷」2020年１月 No.1017
	中島 輝	「自己肯定感ノート」「自己肯定感の教科書」
雑　誌	（株）山と渓谷社	「ROCK & SNOW」 2019 Dec. 086
	（株）ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.871
会　報	おいらく山岳会	「山行手帖」№720
	新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第345
	健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No.489
	兵庫県山岳連盟	兵庫山岳 第630号
	FEEC	「VERTEX」287
	La rivista del Club alpino italiano	「Montagne 360」Dicembre 2019
	一等三角点研究会	聳嶺
	（株）シマノ	Fishing Café Winter2020 Vol.64
	（株）日本運動具新報社	スポーツ産業新報 第2273、第2274、第2275
	群馬県山岳連盟	JSPO「スポーツ ニュース」「フェアプレイニュース」Vol113
	長野県山岳協会	「やまなみ」No.235
	（株）ソル・メディア	「CLIMBERS」WINTER ＃014
	東京野歩路会	「山嶺」Vol.97 No.1078
	（公財）全国高等学校体育連盟	全国高体連ジャーナル 2019 Vol.38
	（公財）京都府スポーツ協会	「スポーツ時報」第132号

11 月 28 日㈭　於：ＪＳＯＳ 14 階
廣川事務局員
⑼ＩＦＳＣオリンピック予選大会
11 月 28 日㈭～ 12 月 1 日㈰　於：フランス・トゥールーズ　平山副会長
⑽近畿地区山岳連盟総合会議
11 月 30 日㈯～ 12 月 1 日㈰　於：比良山岳センター　小野寺常務理事
⑾日本勤労者山岳連盟望年会
12 月 6 日㈮　於：労山事務局　丸副会長、尾形専務理事、小野寺常務理事

60周年募金協力者ご芳名

（2019 年 12 月 27 日現在、敬称略）

20 口：八木原圀明、6 口：尾形好雄
（総額：360 口　　1,800,000 円）

表紙のことば

北部シッキム・ローナク地方の南西面から見るチョモ・ユモ（6,829 m）は、端正な三角錐の山容で、シッキムのマッターホルンと呼べそうだ。山名はチベット語で「チョモ」は女神、「ユモ」も女性又は母の意で、「母なる女神」を意味する。

ナク・チューとティスタ河に挟まれて南東に連なる山群は、チョモ・ユモ山群と呼ばれ、チョモ・ユモは、この山群の盟主である。

初登頂は、1911 年 7 月、イギリス・グラスゴーのＡ．Ｍ．ケラスがシェルパ 2 名を伴って登頂。

（写真撮影者　尾形好雄）

編集後記

明けましておめでとうございます。2020 年は東京オリ・パラ本番の年、昨年のラグビーワールドカップのような盛り上がりと感動を期待する。

ＪＭＳＣＡはその後を見据えた展望が求められている。何れにせよ「体力の維持」を。

（広報担当　水島彰治）

一般財団法人 日本トレイルランニング協会

〒141-0031
品川区西五反田 6-3-23-205
☎03-3492-0355　FAX 03-6451-3767

NPO法人 北丹沢山岳センター
神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会
事務局　〒252-0184　神奈川県相模原市緑区小渕 1545-1
TEL 042-687-4011　FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
◦ 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
◦ 陣馬山トレイルレース実行委員会
◦ 道志村トレイルレース実行委員会
◦ 八重山トレイルレース実行委員会
◦ 東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会
◦ 上野原秋山トレイルレース実行委員会
大会々長　杉本憲昭

登山月報　第 610 号
定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
昭和 45 年 12 月 12 日
第三種郵便物認可
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　令和 2 年 1 月15日
発行者　東京都新宿区霞ヶ丘町 4 番 2 号
Japan Sport Olympic Square 807
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電　話　03－5843－1631
ＦＡＸ　03－5843－1635

山岳雑誌 岳人（がくじん）
山と人、時代をつなぐ「岳人」

2月号 発売中
【特集】地図と天気を読む
★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中！
毎月15日発売　価格880円(+税)

年間購読がおすすめです。
購読割引　送料無料　Tシャツセット
年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。
通常価格12冊 ~~10,560円(税抜)~~ 11,616円(税込) → 年間購読12冊＋Tシャツ 9,680円(税抜) 10,648円(税込)

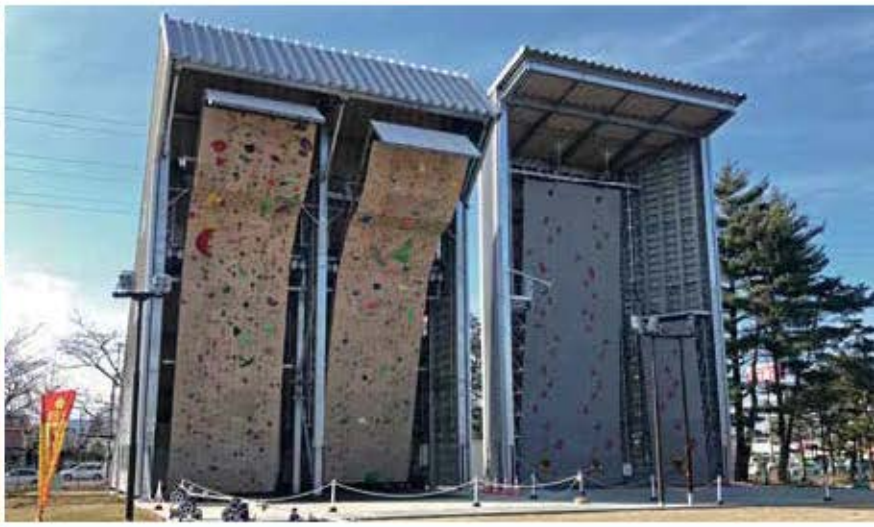
「岳人」年間購読＋岳人Tシャツセット
期間限定キャンペーン
岳人の年間購読を【新規お申し込み】または【ご継続】いただくと、「岳人Tシャツ」クーポンをセットでお届け。
キャンペーン期間（お申し込み日）
2019年10/15㈫～2020年10/14㈬
（2019年12月号から2020年11月号までの年間購読開始が対象となります）
※購読開始号に同封されているクーポンを全国のモンベルストア店頭でTシャツと交換させていただきます。ご来店いただけないお客さまには発送も可能です。

年間購読のお申し込みはこちらから！
https://www.gakujin.jp/
全国のモンベルストアでも受付中！
お問い合わせ　モンベルポスト
フリーコール 0120-982-682／TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP 電話からはご利用いただけません。

あなたを守る。
あしたを作る。
三井住友海上

損害保険と聞いて、
なにを思い浮かべますか？

ケガ、災害、事故…日々の中で起こりうるリスクをカバーする。それは私たち三井住友海上の重要な任務ですが、すべてではありません。たとえば同じ自動車保険でも、暮らしの変化や自動車の進化を見つめて改善を続けること、宇宙開発や再生医療など、まだ世界にない保険を新しく作ることで社会の前進をサポートすることも、とても大切な役割です。変わらない一日に寄り添い、より豊かな明日を実現したい。だから私たちは、守ることと作ること、その両方を繰り返しながら前へ歩み続けます。



東商アソシエート株式会社　www.climbing-tosho.com　Tosho Associate

日山協 山岳共済会 〒170-0013 東京都豊島区東池袋3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397
E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp
月曜日～金曜日 10:00～17:00（祝日除く）

携帯からも資料請求ができます。
https://sangakukyousai.com

WEBからもお申込みいただけます